人生の意義

ジョゼフ・A・ラワリーズ

本日，私は，どのようにしてモラロジーに接しさせて頂いたかをお話したいと思います。

私は典型的なヨーロッパ人です。私はベルギーで生まれ，妻はドイツ人で，子供は３人おり，２人はアメリカに住み，１人はイギリスに住んでおります。フランスの大学でも教えたことがあり，イタリアにはたくさんの友人がおります。このような私が，モラロジーに接して，本当に感銘を受け，皆様方と同じように，モラロジーの熱心な研究者ないしは実践者の１人にならせて頂いているということにつきまして，お話したいと思います。

特に私が，今日のお話で重点を置きたいと思いますことは，このモラロジーは，日本において，広池博士によって創建されたものでありますけれども，全世界の人々に通じるものである，ということです。

まず第一に，モラロジーの国際性ということ，つまりモラロジーが世界に

どのように通ずるものであるかということを申し上げます。次には，私が今日迄どのような経過を経て，モラロジーに接しさせて頂くことができたか，というお話をさせて頂きたいと思います。

私たち人間は，世代を次々と交替していきますが，古い世代は，次の世代へ自分達の学んできたものを伝えて，より良い文化，あるいは，より良い国家，より良い世界を作っていかなければならない訳です。私は，今世紀の始め，1902年にベルギーで生まれました。第1次世界大戦の前でした。その後，第1次世界大戦が起こり，第1次世界大戦から第2次世界大戦の間に，私はイギリスに住んで教育を受けた訳です。その後，第2次世界大戦が始まり，第2次大戦後も，教育の活動を続けさせて頂いている訳です。

私が生まれました第1次世界大戦の前は，ヨーロッパでは，ナポレオンが革命を起こしてから，約100年もたち，一部に戦争が起きただけで，ヨーロッパは全体としては，非常に文化，学術が発展して，イギリス，フランス，ドイツ等は非常に幸せな国々であると，私共は考えておりました。同時に，ヨーロッパが世界の文化，学術，科学の中心として，このまま進んでいけば，世界は，平和な，より幸せな所になるであろうという期待をもっていたのです。そして，第1次世界大戦が起きたのですけれども，その戦争は，それまでもたれていた希望や確信を完全にくつがえしてしまったのです。第1次世界大戦の悲惨な状態を，例を上げて申しますと，フランスの田舎町に行ってみますと，第1次大戦で死んだ人達の碑が建てられていますけれども，第1次大戦のために，フランスでは，20才から40才迄位の若い人達は，大部分が殺されたということです。第1次大戦が始まって，私の家族は，全員イギリスへ移住した訳ですけれども，私達の住んでいたわずか400人位の村の中で，約50人の若い人達が戦争で亡くなったのです。ですから，ヨーロッパでは，第1次世界大戦までに人々が築き上げてきました期待，希望，自信が完全にくつがえされて，人々はむしろ絶望の状態におとしいれられた訳です。実際，強大を誇っていたフランス軍が，だいたい2週間で降伏をしてしまったのです。そのような悲惨な状態は，若い人達の心を揺るがせて，将来一体どうな

るのかという不安，心配をもたせた訳です。

しかし，人々は，なんとかそれを克服いたしまして，1920年代には，もうそのような愚かな戦争は絶対に繰り返すまい，そして，特に発展してまいりました科学と教育の力を借りて，今度は間違いのない，しっかりした，幸せな，平和な世界を将来築くことができるのではないか，という期待をもち始めたのです。

私は，カトリックの信者の家に生まれまして，カトリック系の教育を受けました。カトリック的道徳教育というものは，私の一生涯の基礎に，今日迄残っていると思います。私は，カトリックの宗教教育を受けましたけれども，12才頃イギリスに参りましてからは，今度は，一般の，宗教的でない教育を受けましたが，特に，科学を勉強しまして，数学，物理学，化学が好きで，喜んで一生懸命勉強しました。一方では，科学を勉強しますと共に，小さい時から受けた宗教的影響のもとに，宗教問題，道徳あるいは哲学というものを趣味としていろいろ読ませて頂き，多くの人と議論をしたものです。幸い，私はヨーロッパで生まれまして，最初に，フランス語を勉強しますと，英語あるいはドイツ語を勉強するのは，非常に楽でありまして，科学，宗教，哲学の書物を，英語，ドイツ語，フランス語で勉強しました。

このように，私が，一方で科学，他方で哲学，宗教という2つの方面に興味をもっていましたことから，私が本当に生涯の優れた先生と尊敬しておりますイギリスの天才学者である，パーシー・ナンという先生にお目にかかることができた訳です。このナンという先生は，教育学者でしたけれども，同時に，イギリスの最高の科学者であり，数学者でもありまして，当時の一流の科学者，哲学者と並んで，イギリスの最高の学者でした。このナン先生は，当時，イギリスのロンドン大学の教育学部の学部長をしていらっしゃいました。その教育学部の基本的な，第一の機能は，先生を養成することでありまして，すでに一応の学位をもった学生が，それぞれ科学，数学，その他の教科科目の分野で，ハイスクールの先生になるための訓練を受ける所です。

そのナン先生にお会いする直前は，私は物理学の研究をしていまして，今

日広く使われていますレーダーの最初の発明者であるイギリスの科学者のもとで研究をしていました。その時に，このナン先生とお会いすることになりました。ナン先生は，私を大変可愛がって下さって，「おまえは物理学が良く出来るし，また楽しんで研究をしているけれども，今日の時代には，もっと重要なことがある」とおっしゃいました。「科学の分野では，たくさんの優れた人達が研究や教育を行っていて，科学技術も発展して，正しい生産法その他が非常に進んでいますけれども，もっと重大なこと，国にとって，世界にとって，人類にとって，もっとも重要なことは，教育であり，教育によってこそ，人類は文化を後世に伝え，伝えるだけではなく，更にそれを革新的に，より新しく，より良いものを作っていく，これが最も重要なことである」とナン先生は，私に言われた訳です。そのナン先生が，「教育が大事だから，まず，学校の先生になって，子供を教えて見なさい！　朝早く起きて，学校へ行き，９時頃には学校に行って，あまり勉強したくない子供達の前に立って，その子供達をどのようにして一生懸命勉強させるようにしたら良いのか，そういうことをまず経験してきてみて，それから，このロンドン大学の教育学部に帰って来なさい」とおっしゃったのです。

その当時の教員養成では，先生の人格を立派にするということと同時に，教育上の教育方法，その他の細かな技術面のことも教えていました。大学の教員養成課程は，もうすでに学位をもっていて，これから教育にはいるという学生を訓練しており，学生は，１週間に５日大学で勉強する訳ですけれども，そのうちの２日は教育実習で，朝９時から夕方５時まで，それぞれの専門の科目を学校へ教えに行き，それを学部の教授の先生方が監督して，その教授方法その他について，助言を与えていた訳です。あと２日は，１組18名の学生に指導教官が１人つきまして，それぞれ専門の科目をどのように教えるか，勉強したがらない学生はどうしたら勉強するようになるか，というようなことを議論したり，教えてもらったりした訳です。週５日のうち残りました１日は，一般的な教育理論，たとえば教育哲学で，教育の目標は何か，なぜ子供達を教育しなければならないか，教育の評価はどのようにするか，

というような問題について考え，勉強する。またもうひとつは，教育制度はどのように運営され，教育のためのお金はどこから生まれてくるか，校長先生及び普通の先生の責任は何かというような教育制度・教育行政に関する勉強をしたのです。もうひとつ先生になるために学生が勉強したことは，教育心理学で，子供の学習の動機は何であるか，子供に学習の動機づけをするにはどうしたらよいのか，熱心に勉強させるにはどうしたらよいのか，子供がもっている能力を，自らよりよく伸ばしていくために，先生はどのように助けてあげるべきなのか，というような問題について勉強した訳です。

このロンドン大学の教育学部は，ロンドンの市内にありましたので，非常に便利でした。まず第一に，イギリスの文部省と非常に近かったということです。1930年代のことですが，当時ロンドンは，大英帝国が世界を支配していたその中心的な首都でした。従いまして，ロンドン大学には，世界の国々から学生が集まっていました。日本は，イギリスから１番遠い国ですが，そこからも学生が来ていました。大英帝国の影響下にありましたインド，アフリカ，アラブというような国々からはもちろん，いつも大体，約30から40カ国の学生が，私たちの教育学部で勉強していました。

先程，1920年代には，将来の平和な世界の希望が湧いてきた，と申し上げましたけれども，ご存知のように，1930年代にはいりますと，世界的な経済恐慌で失業が増え，イタリアやドイツには，ファッショ，あるいはナチの軍事活動が始まり，日本においても，満州事変その他の軍国主義が起きてまいりまして，人々は再び不安な状態になってきた訳で，もしここに私の妻が来ていれば，私の言うことが「その通りだった」と言ってくれるはずですが，実は，1933年に，私は第２次世界大戦が必ず起きるだろうと述べ，だから私たちはそれを防ぐために，何をしなければならないかを考えていました。

ご存知と思いますが，Ｈ・Ｇ・ウエルズという有名な方がおりますが，この人はどちらかというと楽天主義的な人ですが，「人類の文明というものは教育と人間の悲惨な出来事との競争である」と言っております。

そのような不安を感じます前は，私は科学を一生懸命勉強しまして，人間

が科学的知識をますます多く発展させ，ますます多くの人々が，科学的な，合理的な知識をもつことによって，戦争を防ぎ，人類がお互いに愛し合い，みんなが合理的に理解し合うことによって，平和な，幸せな世界が来ると信じ，特に科学的な知識に大きな信頼を寄せてきた訳です。しかし，その信頼が打ち砕かれる状態になったのです。そして，1939年に，第２次世界大戦が勃発した訳です。ヨーロッパ人にとりましては，最初の２年間は全くひどい状態でした。

ドイツがヨーロッパ大陸を席巻した結果，フランス，オランダその他の国国の政府は，みんなイギリスに亡命しまして，そこで一応の政府を維持していた訳です。その亡命国の政府の閣僚達は，お互いに集まり，いろいろな相談，協議をしていました。特に，教育の分野におきましては，亡命政府の文部大臣がイギリスにおりまして，ロンドンで，イギリスの文部大臣の積極的な援助や司会のもとに，定期的に集まり，各々の国の教育を今後どうするかという事を相談し合っていました。1943年頃になりますと，もうヨーロッパでは，ドイツ軍は，近いうちに完全に降伏するという確信をもつようになりました。その亡命国の文部大臣会議におきましても，ドイツが降伏して，自分達の国が解放されて，元に戻った時の教育をどうするか，という問題を調査，研究し始めたのです。

幸いなことに，私は，その文部大臣会議のお手伝いをさせていただいておりました。特に，「戦後解放された後の教育をどうするかという問題についての調査委員会」の責任者にならせて頂きました。そして，各国の教育はどうなっているかということを，いろいろな資料について勉強し，非常に興味ある仕事をさせて頂いた訳で，同時に，文部大臣会議におきましては，自分達の国の戦後の教育をどうするかという問題だけでなく，世界の教育をどうするかという事を考え始めておりました。既に，第２次世界大戦の始まる前に，スイスのジュネーブには，国際教育局というものが出来ておりましたし，また，第１次大戦後の国際連盟の機関の１つとして，国際知的協力委員会というのがありまして，世界各国の教育をどうしたらよいか，という事を考えていた訳

です。それを引き継いで，戦後の世界の教育をどうしたらよいか，を考え始めていた訳で，特に，ジュネーブにありました国際教育局や，国際知的協力委員会において，世界の国々の先生を一緒に仲良くさせて，世界の国の子供達が仲良く，平和に暮すようにすることができたならば，世界を平和にする一番確実な方法ではないだろうか，というような事を考えていた訳です。

従いまして，戦争が終りますと，その文部大臣会議は，国際連合の教育科学文化機関へと引きつがれまして，世界中の善意の人々，学者，教育者，文化人等の広い協力のもとに，平和な，戦争のない世界にする努力を開始した訳です。この国際連合教育科学文化機関，即ち，ユネスコの最初の目標は，「戦争は人の心の中に生まれるものであるから，人の心の中に平和の守りを築かなければならない」という文章に言い表わされると思いますが，この文章は，私が調査活動をしていました時に，インスピレーションとして，何かひらめくものがあり，それを書き留めて，文部大臣会議に提出したものが，今ユネスコ憲章の前文に残されている訳です。

この文章の中で「平和の守り」という言葉（訳者注：英語ではディフェンシーズ (defences) という言葉を使っていました。日本語では，最初「砦」と訳していましたが，非常に軍事的な感じがするので，「守り」と変えました）は，軍事的な感じが致しますので，今私は，その言葉を少し変えまして，「戦争は人の心の中で生まれるものであるから，人の心の中に平和の魂を養わなければならない」と書き換えさせて頂きたいと思います。

ユネスコを創設しました時，考えられた事は，ユネスコの理想を世界で実現するためには，各加盟国にユネスコ国内委員会を作り，その国内委員会には，その国の学者，文化人，特に教育者，学校の先生，あるいは学生，生徒も含めて，このユネスコの理想を実現するような活動，努力をしなければならない，ということでした。残念なことですが，現在の状況をみますと，ユネスコ加盟国のすべての国に，国内委員会を作るように規約で決められていますが，世界の大多数の国では，わずか１～２名の事務員がいるだけで，ユネスコ本部と各々の国との形式的な連絡をしているにすぎない状態になっていま

す。大変喜ばしいことには，このようなユネスコ国内委員会の状況の中にありまして，日本は，政府内にあるユネスコ国内委員会は勿論のこと，一般民間人の間にも，全国ユネスコ協会というものがありまして，積極的なユネスコ活動をして，世界のユネスコ活動の指導的役割をしています。しかも，この日本のユネスコ活動につきましては，昨日，皆様がお話をお聞きになりました平塚益徳先生（前国立教育研究所所長）が，長い間ユネスコ国内委員をされ，特に，今年の7月まで約8年間は，日本のユネスコ国内委員会の会長として，国内的にも，国際的にも，非常にご活躍下さったのであります。

今まで申し上げましたことを，簡単にまとめます。第2次世界大戦の始まる前まで，私達は科学的な知識をたくさんの人がもつことによって，世界の平和をもたらすことができる，という希望をもっていましたが，それは完全につぶされてしまった訳です。また，第2次世界大戦後に，科学技術がめざましく進んでまいりますと，1960年代には，科学技術を応用して，世界を何とか幸せにできるのではないか，という期待がもたれました。今日，また，科学技術や教育も，世界・人類を平和にするためには，まだ，非常に微々たる力しかないということを，あらためて感ぜざるを得ない状況です。そこで私達は，知識や技術をいかに広く，たくさんもちましても，人類の幸せを築くことはできない，という結論に達します。残されているものは，私達人間の考え方・心・道徳的な精神を新しく作り上げなければ，そういう目標を達成できない，という結論になる訳です。

1960年代，特に64年，65年頃，そういうようなことを考えておりました時に，平塚先生を通じて，私はこのモラロジーに始めて接しさせて頂いたわけです。その当時，平塚先生は，私に，日本のモラロジー研究所を訪問し，所長であった広池千英先生にお会いになったらどうか，とおすすめ下さいました。こうして私は，モラロジーというものがあるということを聞かせて頂き，一体モラロジーというものは何か，そして，しかも平塚先生は立派なクリスチャンですので，クリスチャンである平塚先生が，なぜキリスト教でないモラロジーを勉強されるのか，と質問を返してみた訳です。

平塚先生は，私の質問に対しまして，「モラロジーは宗教ではない。私は勿論キリスト教徒であるけれども，モラロジーを勉強することによって，より良いキリスト教徒になれると確信しています」とお答え下さったのです。従いまして，仏教徒である方も，モラロジーを勉強することによって，より良い仏教信者になることが出来る，というお話を聞きまして，一体，モラロジーとはどういうものなのか，私は一生懸命研究させて頂こうと思った訳です。幸いなことに，モラロジーにつきましての英文の資料などを読ませて頂きまして，モラロジーを勉強しますと，私の心を深く打つものがありました。それをこれからご説明させて頂きます。

私の考えでは，モラロジーの科学的な理論の体系は，4つの柱の上に成り立っていると考えます。

まず第一に感じましたことは，人間と自然が完全に一体になっているというモラロジーの考え方です。人間は勿論，自然の一部であるとともに，また，人間のすることが，自然に影響する。人間が，自然や環境と一体になっているという，深い信念がモラロジーにあるということで，私は深く心を打たれました。この考え方は，広池博士が主として日本の神道から得られたものだと思いますけれども，こういう考え方は，神道からきたかどうかは問題ではなくて，その考え方自体が重要であると思います。

第二番目には，私たち人間の見たり聞いたりさわったり，というような感覚を超えて，私たちのまわり，あるいは，この自然・大宇宙の中に大きな目に見えない力があるということ，そしてその大きな宇宙の神秘，力に対して，神と申しましょうか（モラロジーでは宇宙自然の法則と申されている訳ですけれども），そういう大きな力，深い大きい魂や心に対しまして，私たち人間は，恐れの気持，謙譲の気持をもつということの必要性が，深くモラロジーの中で感じられたことです。このような考え方は，すべての仏教の宗派に見られるところではないかと思います。

第三番目に私が強く打たれましたことは，人類同胞に対する大きな愛情の重要性でした。これは，主としてキリスト教から来ているのではないかと思

いますけれども，キリスト教から来る来ないは問題ではなくて，人類に対する愛情・慈悲というものが基本的に大切だということ，それがモラロジーに説かれておりまして，私は深く心を打たれた訳です。

第四番目には，広池博士が，常にソクラテスの考え方を踏まえて，人間の理性，科学的な思考というものを絶えず強調してこられた訳です。

まとめますと，第一に，人間と自然の一体性，第二に，人間を超えた宇宙の神秘，大きな力に対する人間の尊敬，あるいは謙譲，第三番目が，同胞に対する深い愛情，第四番目に，理性，科学的思考を強調しておられる，その４つの柱に，モラロジーの理論的な体系が組み立てられているということに私は深く印象付けられた訳です。

そのような４つの柱に支えられた，いわば社会哲学というようなもの，これは，孔子の考え方が2000年の歴史のテストを経て，今日まで続いているものですけれども，そういう一般的な社会哲学という考え方を，広池博士がまとめられまして，慈悲・寛大・自己反省という３つの根本的な精神として説明されておられる訳です。その慈悲・寛大・自己反省という３つのモラロジーの根本精神は，私たちが人生を送っていく上に羅針盤として，私たちが問題にぶつかり，そして解答ができない時に進むべき道を教え示してくれるものです。

そしてさらに，広池博士は，私たちが問題にぶつかりました時に，具体的には，まず第一に，自分の今日ある一番の大本であります家の伝統によく相題してみるということを教えておられます。

第二番目には，私たちは，それぞれの国に住んでおりますから，問題にぶつかりました時には，その国の伝統がどういう考え方をもっているかということに考慮を払う必要がある訳で，この国の伝統というものにはいろいろな解釈の仕方があると思いますし，日本とは性質が異なる国の場合には，いろいろ考えさせられるわけですけれども，少くとも国が存続して，その中で国の文化，文明が持続されてまいります中には，その指導的な力の中に，徳というものがある訳ですから，それに私たちは敬意を払い，その考え方に考慮

を払わなければならない訳です。

さらに，この家あるいは国を超えて，人類という大きな観点から考えて，この人類に共通する最高道徳というものを考えなければならない訳です。

以上，モラロジーに関して，私が非常に心を打たれた諸点について申し上げた訳ですけれども，実は，私はこういう考え方は，決して日本とか，モラロジー特有のものではなくて，すべての人類が共通して受け入れることができる普遍的な原理であると考える訳です。私は，このようなモラロジーに示されている，東西を問わず，すべての世界の人々に受け入れられる普遍的な原理というものに，心の底から共鳴し，支持し，その実践に努力させていただきたいと思う者でございます。

今日の戦争の危険性は，昔の戦争が一地域とか一国とかに限られたものから，何億あるいは全人類の生死を決するような大きな破壊力をもった，大変な状態になっている訳です。そのような恐しい兵器が，科学の力によって造り出されている訳ですけれども，私たちは，何としてもそのような戦争を防がなければなりません。その戦争を防ぐ方法としましては，世界政府と申しますか，世界の国々の上にもう一つ大きな力をもって，そのような恐しい破壊的な戦争の手段を使わせないようにすることができる大きな力が必要であると，私は考えます。そのような世界を抑える力は，武力ではなくて，世界の法律を作らなければならない訳で，その世界の法律は，世界の人類に共通する道徳を基礎に作られなければならない訳です。

このような状態のもとで，昨年の12月，ユネスコの最高の責任者であります，ユネスコ事務局長のエムボウ（M'Bow）という方が，メキシコで，ラテンアメリカ，カリブ海地域の文部大臣会議がありました，12月４日の開会式の席上で，「今こそユネスコは，世界の次代をになう若者の教育のために，世界に共通する道徳原理に基づいた教育を考えなければならない」ということを発言しておりまして，大変喜ばしいことだと考えている訳です。

私は，ユネスコが世界の道徳教育の基礎を考えます場合に，モラロジーが，その基礎的なものの一つに取り入れられるということ，そして，いつの

日かモラロジーが国際連合にも認められ，さらに，世界の平和，人類の幸福のための基礎的な思想であると認識されるようになることを信じている者です。

どうもご静聴ありがとうございました。

（ここに訳出しましたのは，Ｊ．Ａ．ラワリーズ博士が，1980年８月７日に，モラロジー研究所・広池学園主催の教育者研究会で行なわれた講演の内容です。）

（麗沢大学教授　小泉喜平　訳）